
Peace-of-Destiny

横山 龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P e a c e - o f - D e s t i n y

【Nコード】

N 4 2 1 2 Y

【作者名】

横山 龍也

【あらすじ】

彼女が出来た速瀬 悠二だったが、何故か暗い顔で家に帰った。

一人暮らしの家に帰ると・・・そこには見知らぬ女の子が！？

そして悠二は巻き込まれていく・・・運命の欠片に・・・

家に来た女の子？

2011年――

ここは日本国北海道札幌市．．．

辺りは暗くなり、車も少なく一瞬静まりかえったように静寂に包まれていた。

20階ほどだろうか．．．そのビルの屋上に腰まである長い銀髪を風になびかせている者がいた。

見ればまだ子どもではないか．．．

ビルの端でしゃがみこみ、まるで街並みを眺めているような感じである。

こんな夜中にビルの屋上で何をしているのだろうか．．．

誰もがそう思うようなシチュエーションだ。

女の子なのだろうか？

その銀髪の子どもが一人言のように．．．

いや、誰かに話しかけているように口を開いた。

「次は日本！！
ここにいればいいのだが・・・」

誰かを探しているのだろうか・・・

やはり声はまだ幼く、しかしよく透き通っている。

「速瀬 悠二・・・

あの人の息子だもんなあ」

楽しみだ！」

あの人とは誰かはわからないが、速瀬 悠二という人物を探しているようだ。

誰も知らないであろう銀髪の少女？がビルの屋上にいた日から次の日。

学生が学校から帰る時間であろうか。

一人の男の子が暗い顔をしながら学校から帰っている。

彼が銀髪の少女？が探しているであろう速瀬^{はやせ} 悠二^{ゆうじ}だ。

悠二「はあ．．．
わけわかんねーな」

高校二年生になった悠二は、少し長めの黒髪で顔はどこにでも居そうな普通の男の子だ。

しかし、そんな普通の彼も悩みがあるようで、ため息をつきながら学校から家に帰っている。

この日、悠二に彼女が出来たらしい。

しかし何故それが悩みなのだろうか。

普通の高校生なら、彼女が出来れば喜びを隠せないほど気持ち悪い笑みを浮かべ、スキップでもして帰るんじゃないかと思うほどテンションが上がるものだ。

それに、どうやら悠二が告白して付き合うことになったようである。好きになった女の子に告白をして、しかも付き合うことになったのに悠二は少し不満そうである。

それは悠二が告白をして、付き合うことになった時の話である。

峰岸 葵 みねがし あおい

悠二はこの女の子を好きになった。

あまり人と一緒にいる姿を見たことがなく、誰かと話しているところもほとんど見ない。

それでも彼女は男子から人気がある。

顔がかわいいと言ってしまえばそれまでだろうが、悠二はそれに加えて彼女の独特な雰囲気にも惹かれた。

どこが好き？

そんな質問をされると正直困ってしまう。

それでも悠二は自信を持って彼女が好きであると言える。

どこがということではない。

彼女を好きになったことは紛れもない事実で、真実なのだ。

今日ようやく少ない勇気を振り絞って告白をした。

その告白に彼女は応えてくれた。

しかし彼女は……

悠二「え？」

葵「付き合うということは了承しましたが、これからあまり私に話しかけないでください」

何を言ってるのだろうか。

付き合うということは恋人同士になるということだ。

あまり話しかけないでください？

悠二は葵が何を言ってるのかわからなかった。

悠二「ちょ．．．どういうこと？」

悠二が恐る恐る聞いてみるが、葵は指で耳を塞いでいた。

すると葵はおもむろに携帯を取り出し、何やら打ち出して悠二に携帯の画面を見せた。

『話がある時は出来るだけメールで！！』

携帯にはそう書かれていた。

それを見せた葵はすぐに悠二の前からいなくなってしまった。

結局、なんでそんなことになったのかはわからないが・・・

悠二は葵と付き合ったその日にほとんど葵と喋れなくなってしまった。

悠二がそのことを思いだしていると家に着いた。

悠二は一人暮らしである。

と言ってもマンションやアパートではなく、普通の一軒家に住んでいる。

母は幼い頃に病気で亡くなり、父は放任主義で悠二が中学生になった頃からいろんな所に旅に出ているらしい。

つまり悠二はもう4年ほど父親に会っていない。

兄弟もいない一人っ子なので、一人暮らしを4年もしていた。

誰もいない家に悠二は「ただいま」と言って玄関のドアを開けた。

玄関のドアを開けた悠二の目に飛び込んできたのは、銀髪の女の子だった。

誰もいるはずのない家に、しかもその女の子は宙に浮いている。

「おかえり」

そう言つて女の子は両手を上げながら、宙に浮いたまま悠二に近づいてきた。

悠二「
・
・
・
・
・
・
・
」

ボタン

悠二（なんか宙に浮いた女の子がいた――――！！！）

悠二は咄嗟に扉を閉めた。

悠二（見間違いか？てか外国人・・・？）

髪が銀髪だったよな？)

悠二がドアの外でいろいろと考えていると、悠二が閉めた玄関のドアが開いた。

「入らないのか？」

見間違いじゃない。

悠二の目の前には先ほどの女の子が宙には浮いていなかったが、確かに存在していた。

するとその女の子は悠二に指を向けながら少し怒っているかのような口調で口を開いた。

「まったく何をしておるのだ！

ここはお前の家だろう」

もつともである。

悠二「え．．．そうだけど．．．てか君誰？」

「え？」

悠二は誰もが思う質問をした。

いきなり自分の家に知らない子どもがいるわけだから当たり前質問である。

その質問にその子どもは胸をはって答えた。

「誰って．．．

私は“エル・クラフト”に決まっておるだろう」

悠二（いや、誰だよ！！？知らねーよ！！）

悠二は言葉には出さなかったが、心の中で思いつきつつこんだ。

悠二「俺．．君とは初対面だと思うんだけど．．」

エル「あ．．私も初対面だ！

一緒だな！！」

悠二「一緒じゃない初対面ってあんの？」

そんなわけわかんない会話をしながらも、悠二は先ほど疑問に思ったことを聞いてみた。

悠二「てかさ．．俺の見間違いだと思うんだけど、さっき宙に浮いてなかった？」

エルはその質問を待ってましたと言わんばかりにすぐに答えた。

エル「私は10才だが“A・A”（アーム・アビリティ）の適合者だからな！！

あれが私の能力と言ってもいい」

エルは自信満々に言ったが．．

悠二「何言ってるか全然わかんないんだけど．．」

エル「ええエ！！？」

いきなり何を言ってるのか、だがエルはありえないという感じで驚いている。

エル（アレ？？）

エル「まさか悠二．．．これ読んでないのか？」

そう言つてエルはポケットから手紙のような物を出してみせた。

エル「この手紙には『A・A』（アーム・アビリティ）のことや『私』のことが“がっかり”と書かれているのだぞ？」

悠二「がっかり！？」

エル「本当に読んでないのか？」

言い間違えたのだろうが、悠二のつつこみを無視してエルは続けた。

しかし、

悠二「いやいや．．．何で俺が読んではずの手紙が君のポケットから出てきたんだ？」

その通りである。

エル「．．．」

エルは気がついた。

この手紙を出すのを忘れたことに．．．

くしゃ

くしゃ？

事もあるうちにエルは持っていた手紙をくしゃくしゃに丸めて……
そして後ろに放り投げた。

エル「本当に見てないのか!？」

その時丸められた手紙はエルの後方10mぐらいで綺麗な弧を描きながら飛んでいる。

悠二はその手紙を見つめながら

悠二「今……見てる気がする……かも。
内容はわからんが……」

すると丸められた手紙はポトツツという音をたてて床に着地した。

エル「し、仕方がないから私が説明しよう」

明らかに動揺している。

エル「『A・A』（アーム・アビリティ）とはその名の通り、武器能力のことだ」

悠二「武器能力？」

エル「そうだ……しかし……武器と言っても剣や銃のようなも

のではなく、闘うための武器。

まあ、超人的な特殊能力のようなものだ」

エル「中には身体から火や水を出す者もいれば、人を操ったり透明になれる者もいるらしい。

その力を得るには『A・A』の媒体となる物とある契約が必要なのだが・・・」

エルはそう説明すると、今度は自分のことについて話した。

エル「そして私も『A・A』の契約者なのだ。私の能力は・・・」

エルがそこまで言って悠二を見ると、エルを疑いの目で見ていた。

悠二「ハハ・・・」

エル「わっ私の話を信じていないのか!？」

悠二に信じてもらえないエルは今にも悠二に飛びかかりそうだった。

悠二「信じるわけねえーだろ!!」

勝手に人の部屋に入り込んでわけわかんねーこと言いやがって!」

悠二「てか鍵掛かってんのにどうやって家の中に入ったんだよ!？」

エル「屋根からだけど」

悠二（屋根!!!??）

悠二はエルがどうやって屋根から入ったのかを気にはなったが、それを無視して続けた。

悠二「と、とにかく俺は今子どもの遊びに付き合ってる暇はないんだ」

悠二は少しイライラしながら話をしていると、エルが割り込んできた。

エル「まあゝ待て！

あせるでない！！重要な話はこれからなのだぞ！！
最後まで話を聞いてくれ・・・今悠二は大変なことにイ」

エルが話始めてから悠二は家を出ていつていた。

つまりエルの前から悠二はいなくなっていたのだ。

エル「どこに行ったのだあゝユウジィィィ」

家に来た女の子？（後書き）

初投稿です。

台本書きですが・・・楽しんでくれたら嬉しいです。

アーム・アビリティ

エルが家で悠二を探している頃、悠二は商店街に来ていた。

悠二（最近の子どもは遊びも凝ってるなあ．．．何“ごっこ”かはわかんねーけど付き合いきれん！！）

悠二（そんな事より今は峰岸さんだ！！

メールで話そうって言ったけど．．．

アドレス聞くの忘れた！なんで俺はそんな大事なことを聞き忘れたんだ）

悠二はそんな事を思いながら商店街を歩いていると、本屋で立ち読みしている葵を発見した。

悠二「あっ！！」

葵も何かに気づいたようで、読んでいた本を置いて悠二の方に振り向いた。

すると悠二は携帯電話を取り出し、文章を書き始めた。

葵に「あまり話しかけないで」と言われたことを守っているのだから。

『アドレス聞くの忘れてて．．．．．』

教えてもらってもいいかな？」

ガッ

悠二「え？」

しかし葵は、悠二の携帯電話を見る前に悠二の右腕を掴み、急にどこかへ走り出した。

悠二「ちょ．．．どうしたのさ？」

急に走り出した葵にそう言ったが、「話し掛けないで！！」と言われ、悠二はわけもわからぬまま二人は無言で走り続けた。

悠二（なんなんだ．．．いきなり１０分以上も走らされて．．．．

．．．
峰岸さんは何も言わないし、今日わけわかんねーことばかりだ）

二人が最終的にたどり着いたのは大きめの公園だった。

しかし、もう夕方だからなのか公園には悠二と葵以外だれもいなかった。

すると葵が悠二に．．．．

葵「速瀬君．．．その腕時計って誰にもらったの？」

悠二（腕時計．．．？てか、喋ってもいいのかな？）

悠二の左腕には銀色の腕時計がしてある。

悠二は葵に話し掛けられたことで、口を開いてみた。

悠二「これは、親父からもらった物だけど（あ、怒らない）はずしかたがわかんなくてずっとつけてるんだ。
これが何？」

すると葵は悠二にしては驚きの言葉を発する。

葵「速瀬君は『A・A』って知ってる？」

悠二「A・A!？」

悠二（確か．．．あの子どもが言ってたような）

確かにエルが言っていた。

悠二は冗談じゃなかったのかと苦笑いをした。

それを見ていた葵は、悠二がアーム・アビリティについて多少知っ

ていることに安堵していた。

葵「おそらく速瀬君がつけているその腕時計がアーム・アビリティだと思います」

悠二「え！？でもアーム・アビリティって武器能力のことで物ではないんだろ？」

エルという子どもはそう言っていた。

葵「違います。ですが、契約する前のアーム・アビリティは物であることが多いんです」

次々と語られる真実に、悠二はただただ驚くことしか出来ない。

心無しか声も次第に大きくなる。

葵「見につけたら外すことができないのはアーム・アビリティの特長でもあります」

悠二「じゃーやっぱりこれがアーム・アビリティとかいうやつなのか？」「」

悠二は叫ぶほど大きな声で言った。

葵「うるせーっ！！！！
声でかいんじゃない」

なんと葵は悠二の右ほほをグーで殴っていた。

殴られた悠二は地面に尻をつき、右手で右ほほを押さえていた。

葵「もつと静かに話してください。声大きすぎです」

悠二「はい．．．．．すびせん．．．．．」

いきなり性格が変わった葵に、悠二は恐怖を覚えた。

彼氏なのに．．．．．

葵「こうして普通に話してるだけでも苦痛なんですから、気をつけてください」

話し方は戻っているのだが、心なしが無表情である葵が恐ろしくなってきた。

何故あんなに怒られたのだろうと悠二が思う前に葵が話し始めた。

葵「実は私もアーム・アビリティの契約者なんです」

悠二「え？」

本日二度目のパンチがくるのでは？
そう思うほどに悠二の声は大きかった。

悠二は咄嗟に手で口を押さえた。

悠二（や、やばい）

ものすごい形相で悠二を見ている葵だが、葵からのパンチはなかった。

その代わりに

葵「次やったら“殺し”ます」

そう言われたただだった。

悠二（~~~~~もう喋りたくねえー）

二人とも冷静になったところで話を戻す。

葵「私の能力は“アブノーマル・ヒーリング”つまり『異常聴力』です。

遠くの物音や話し声、心音ですら半径5km先まで聴くことができます。

ですから先ほどの様に耳元で大きな声を出されると頭がクラクラしてしまつのでやめてください」

葵はそこまで言って、「不快です」と付け足す。

悠二「な、なるほど」

先に言ってほしかった……

そんな悠二の思いも虚しく、話は続く。

葵「突然走り出したのは音が聴こえたからです。」

悠二「音？」

葵「正確には音が聴こえなかった」

悠二「？」

葵「あの雑踏の中、“無かった”音が急に現れた……………と言ったほうがいいでしょう。

あまりにも不振だったので咄嗟に逃げました」

悠二は何がなんだかわからない。

葵「“一応”私は速瀬君の彼女ですから守らないと……………」

悠二（一応！？）

葵「おそらく速瀬君は誰かに狙われています……………」

悠二「え？」

狙われてるって誰に！？」

いきなり狙われていると言われても……………

葵「わかりません……………」

しかし、狙われる理由ならわかります」

葵は表情一つ変えずに淡々と話続ける。

悠二「ど、どんな理由？」

恨みを買った覚えはない。

悠二はどちらかといえば社交的で友人もたくさんいる。

しかし、葵が言った理由に悠二はすぐに納得した。

葵「お父さんから貰ったというその時計……つまりはアーム・アビリティです。」

契約もしていないので、その者は速瀬君からアーム・アビリティを奪って契約するつもりなのでしょう」

「アーム・アビリティは貴重ですから」と付け加えて葵は言った。

悠二は左腕の時計を見ながら、（こんな古くさい時計が……？）
と思った。

葵「迷ってるんですか？」

葵が発したその言葉に、悠二はビクツと身体を動かした。

そうだ！

誰かに狙われているのなら、俺がこのアーム・アビリティとかいう物と契約さえすれば狙われないんじゃないか？

葵「一概にそうとは言えません」

悠二の心を読んだように葵は言った。

葵「その能力が貴重であれば狙われる理由になります」

悠二「でも契約したらその“物”自体がなくなるんだろ？」

確かそんなことを言っていた。

悠二「契約されたアーム・アビリティをどうやって奪うんだ？」

もつともな質問だ。

アーム・アビリティは契約前には“物”であることが多い。

ってことは、契約してしまえばアーム・アビリティは能力として人に“仕える”ことになる。

能力になってしまったアーム・アビリティをどうやって奪うのか．．．

答えは実に簡単なことだった。

葵「契約者のアーム・アビリティを奪うには．．．

その契約者を殺せばいいんです」

殺す。

つまりは死ぬこと．．．

誰かに狙われている悠二は急に余命を宣告された病人のような感覚に陥った。

そんな絶望的な表情をしている悠二に、葵はクスツと笑って安心の言葉をかけた。

葵「まあ〜でも、狙われているというのも私の気のせいかもしれませんが．．．

あれから不振な音も聴こえないので多分大丈夫かと」

悠二「そっか．．．」

確かにいきなり誰かに狙われているなんて非現実的な事なんて起こるわけがない。

安堵した悠二は葵にそろそろ帰ろうと言いかけたその時．．．急に葵が悠二の服を掴んで、悠二を自分のほうに引っ張り上げた。それとほぼ同時にズン．．．とした音がしたと思ったら、今まで悠二がいた場所に2mはあるであろう大男が腕を地面に突き刺しているのがかろうじて悠二には見えた。

空はもうオレンジ色に染まってきて、ここからの眺めは絶景である。この街で一番高いビルの屋上にエルは立っている。

エル「まったく悠二はどこに行ったのだ？」

悠二が葵に引っ張り上げられりより少し前の時刻、悠二がエルの話 を聞かずに家を出てから少し経った時．．．

エルは悠二を探すため、何故か高いビルに登っていた。

高い所に行けば、探すのが楽なんじゃないかと考えたのだろう。

エル「大事な話をする前に居なくなりおって！」

こんなことを言っではいるが、特に焦っているような口振りではない。

まさか上にはいないだろうと、空を見上げたりしている。もちろん悠二はいない。

そこにいたのは一匹のカラスだけだった。

この街で一番高いビルにいるのだから、悠二が空でも飛ばないかぎり居るわけがない。

カラスが見守る中、エルの一人言は終わる様子はまったくなかった。

エル「まだ契約のことと話してないのに・・・

誰かに襲われてなければよいのだが、まあこの短時間で襲われてたら奇跡だなっ！」

ハッハッハとエルはお気楽にカラスに向かって話している。

するとカラスは何かを感じたのかカー、カーと言って飛び立ってしまった。

その直後、ズンツという音とともにまるで地震のような強い揺れがエルを襲った。

エル「あっ！！」

その衝撃のせいかエルは足を踏み外し、そのビルから地上へと落ちて行ってしまった。

エル「・・・・・・・・」

しかしエルは何も慌てることもなく、そのまま落ちていく。

エル「いきなり何なのだ？

まさかこれが“あの有名”な地震というやつか？？

フッフ、初体験だな」

微かに口元をニヤリと吊り上げながら、エルは地震という初体験に興奮しながら地面に向かって真っ逆さまに落ちていった。

悠二「……………」

悠二は地面に座り込んだまま、今起きたことを思い返していた。

悠二（何なんだ？

何が起こったのかわからない。

今わかることは、峰岸が引つ張ってくれなきゃ死んでたってことだ
……………

いつの間に目の前にこんな大男が？

そう。

今悠二と葵の目の前には、二人に向かって拳を降り下ろした大男がいる。

大男「ぶしゅー」

悠二（こいつが俺を……………

この時計を狙っているのか？

本当に……………殺す気で……………）

おかしい……………

そう感じていたのは葵だった。

葵がその大男を“確認”できたのは、葵たちの頭上で今まさに拳が

降り下ろされようとしている時だった。

葵（契約者？

いや、どんな能力でも私は心臓の音だって聞き分けられる。

鼓動も．．．呼吸も．．．足音さえ聞こえないなんて．．．）

葵はぐちゃぐちゃになっている頭の中を整理している。

もちろんこの時も大男からは目を離さない。

大丈夫．．．

あの大男からは心臓の鼓動も息使いも今はしっかり聞こえる。

私の能力は戦闘向きではないけど、“筋肉”の音を聞いていればあの男が次に動く瞬間もどいう攻撃をするのかもわかる。

さっきみたいにまたかわせる。

隙について速瀬君と逃げればそれでいい。

葵はいろんなことに気遣いながら、男を見ていた。

見ていたつもりだった。

いや、しっかり見ていた。

しかし、葵が気づいた時には男の拳が葵の腹部にめり込んでいた。葵が脳で理解する前に公園の隅まで吹き飛び、葵は意識を失った。

アーム・アビリティ（後書き）

いやあ〜どうですか？

見づらいとかあれば是非言ってください。

初めてなんでどう書いていいのか・・・。。。

あ、こういうのって最初の1章目に言っべきですね。笑

では次章も頑張って書きます！

日常と友達

エル「むうゝひまなのだあ」

あれからもう3日が経っていた。

エルはあのあと悠二の家に居候することになり、今はリビングですることもなくゴロゴロしている。

昼の12時。

当然悠二は学校に行っている。

エルは悠二から留守番を頼まれた。

エル「悠二はいつ帰ってくるのだ？」

そんな一人言もただ虚しく家に響きわたっているだけである。

場所は変わって悠二が通う学校。

今は昼休みの時間で悠二は葵とご飯を食べている。
すると葵はフツツと笑った。

悠二「どうしたんだ？」

なるべく小さな声で悠二は葵に話しかけている。

葵「エルちゃんがひまだと嘆いていますよ」

悠二の家から学校まではそう離れてはいないため、葵は『異常聴力』で聴こえている。

悠二「あいつ、ちゃんと留守番してるみたいだな」

そんな話をしながら、二人は黙々とご飯を食べていた。

「おい、悠二!!」

そんな中、一人の男子生徒が話しかけてきた。

悠二「おう、千秋ちあきじゃないか」

彼の名前は千秋というらしい。

千秋「なんでお前が峰岸と一緒にご飯食べてんだ？」

バンッ

すると葵が急に机を叩いた。

葵「吉野くん、うるさいです!!」

葵のいきなりな行動に千秋はびっくりしていた。

悠二「千秋、もう少し静かに話してやってくれ・・・」

吉野 千秋。

悠二が中学の時から親友で、かなり惚れやすい性格だが彼女は出来たことがない。

学校もサボりがちで部活にも入っていない・・・いわゆる悪友というやつだ。

悠二「なんでって、俺たち付き合ってるからな」

千秋「なにーーーーー!!!!!!?」

バチーン

葵からの強烈なビンタが千秋の左ほほにクリーンヒット。

千秋「いつの間に峰岸と付き合ってたんだよ……」

さすがにもうくらいたくないのか千秋も小さい声で話だした。

悠二「昨日からな」

千秋「くっそー!!」

学年一の美少女をつかまえるなんて羨ましい奴め!!」

悠二「千秋だって顔は悪くないんだから普通にしていればモテるのにな……」

葵「吉野くんはもう手遅れなんじゃないですか?」

千秋「手遅れじゃねーよ!!」

俺だってかわいい彼女の一人や二人つくってやるぜー」

いつもは悠二と千秋がクラスでも賑やかに話しているのだが、今日から葵というすごいツッコミが出来たおかげでまた一段とつまづくなっていた。

「あんたたちうるさいわよ?」

千秋「げっ!

委員長……」

「まさか葵があんたなんかと付き合つとはねえ」

葵「あかり……」

悠二「加藤か」

加藤 あかり。

このクラスの委員長で、葵と一番仲良い女の子だ。

あかり「こいつのどこが良かったんだか」

葵「悠二くんはこう見えて強いところもあるんだよ?」

あかり「ふ〜ん、そうなんだ」

するとあかりは悠二の胸ぐらを掴んで

あかり「悠二、葵を泣かせたら許さないからね!」

悠二「そんなことしねーよ」

そんなことを話していると、チャイムが鳴ったので広げていた弁当を片付けた。

昼の一発目の授業は数学だ。

悠二（だりいな）

悠二は基本的に授業は聞かない。

別に頭が良いわけではないのだが、まあただめんどくさいだけなのだ。

千秋は授業をサボったのか教室にすらない。

葵は………眠いのか頭をカクカクさせている。

悠二（あれで成績はトップクラスなんだから、出来が違っんだろうな）

あかりは常に集中して授業を聞いている。

さすが委員長様だ。

千秋「悠二、どっか行こうぜ」

授業が終わり、放課後になった。

千秋は昼休みと放課後になればクラスに現れる。

しかし、古典と地理、家庭科と体育だけはしっかりと授業に出ている。

何故かはわかるだろ？

その教科の担当の先生が美人だからだ。

まあ、授業に出ているだけで、テストでは点は取れていないんだが。

悠二（こいつ、よく留年しなかったな……）

千秋「おい、悠二――！

聞いているのか？」

悠二「ああ、悪い悪い。」

お前の顔がシマウマに似てることについてだったか？」

千秋「ちげーよ!!」

てか全然似てないだろ!!?」

どっか行こうぜって言ったんだよ」

悠二「そうだったっけ？」

千秋「お前の耳はどーなってるんだ!？」

悠二「あゝはいはい。」

だが悪いけど今日は無理だ」

千秋「何で？」

悠二「何でもだ」

家に小さな女の子がいて、そいつに飯作らなきゃいけないなんてさすがに言えない。

千秋「もしかして峰岸とデートか？」

悠二「まあ、そんなとこだ」

今日は峰岸も家に来てエルに会いた行って行ってたし、あながち間違いないだろ。

千秋「かぁー、ラブラブでいいですなぁ」

悠二「千秋．．．あそこに彼氏がない超美少女でお前のことが好きな女の子がいるぞ？」

千秋「え！！？

どこどこ？」

悠二「見失ったけど、校庭の方に行ったみたいだ」

千秋「まじでえ！？

今行くからねえ」

そう言つて千秋はものすごいスピードで教室から出て行つた。
もちろんそんな美少女も、千秋を好きな女の子もこの世にいないわけがない。

悠二「ふう．．．

千秋に夢を見させるなんて、俺はいいやつだな」

そんな一人言を言っている悠二の後ろに、葵とあかりがものすごく良い笑顔で親指を立ててナイスポーズをしていた。

放課後――

全ての授業が終わり、悠二と葵は一緒に下校している。

葵はエルに聞きたいことがあるらしい．．．

二人で下校してはいるが、会話がない。

というよりは、周りにはそう見えるというだけで二人は会話をしている。

まあ、今のところ悠二が一方的に話しかけているだけなのだが．．

悠二は葵に怒られるのはもう避けたいので、呟くよりも小さく、か細い声で葵に話しかけているのだ。

そして今、下校しだして初めて葵が悠二に返答した。

悠二「そういえば、峰岸さんはエルに何を聞きたいの？」

葵「もちろん、アーム・アビリティのことです」

悠二はその言葉に少し疑問を感じた。

悠二は葵からアーム・アビリティについての基本的な事はだいたい説明を受けた。

だからこそ、悠二は葵がアーム・アビリティについて相当の知識があるものであると思っていたのだ。
しかし、違うようだ。

葵「私がアーム・アビリティの存在を知ったのは、実は最近なんです」

悠二「そうだったの!？」

葵「はい、昔からただ耳が他の人よりは異常に良いという認識しかなかったんです」

悠二「そうだったのか」

葵「だから、何故アーム・アビリティというものがこの世に存在しているのか．．．

闘うための武器とはどういう意味なのか知りたいんです」

悠二「それをエルが知ってる？」

エルはまだ10歳ぐらいだ。

あんな小さな子どもが知っているのだろうかと思ったが、あんな戦闘を見せられた後では期待してしまう自分がいる。

悠二（とりあえず今考えても仕方ないか・・・）

家に帰ればエルがいる。

今考えるより、エルに聞いたほうが効率が良い。

それから二人は特に話をするわけでもなく、家に向かって歩いて行った。

日常と友達（後書き）

今日で三章更新しました。。。

毎日このペースで書ければいいんですが・・・。
やっぱり大変ですね。

でももう見てくれているか方がいてくれて本当に嬉しいっす。
これからも・・・・・・・・・・頑張ります！

目的

悠二「だだいま」

葵「…………おじゃまします」

家のドアを開けた悠二と葵は家の中に入った。

ドタドタドタ！！

エル「ゆ～～じ～～！！」

入った途端にエルが悠二に向かって飛び込んできた。

悠二「ぐおっ！！？」

悠二はエルを受け止めきれずに、ドアに後頭部を打ち付けた。
その横で葵は耳を塞いで悲しい顔で悠二を見ている。

エル「ぬ？」

葵「気絶．．．してますね．．．」

あれから数分。なんとか悠二も目を覚まし、三人はリビングのソファーに腰掛けている。

エル「葵も来たのか!」

満面の笑みで、今にも跳び跳ねそうなエル。

葵「ええ。」

ちよつとエルちゃんに聞きたいことがあって．．．」

エル「聞きたいこと？」

なんなのだ!？」

その会話を悠二も真剣に聞いている。

葵「アーム・アビリティの存在意義について、エルちゃんが知っているのかと思ひまして．．．」

それを聞いてエルは「ん．．．」と腕を組みながら唸り始めた。

葵「やっぱり何か知ってるんですね?」

悠二「?」

エル「そうだな．．．」。

アーム・アビリティの全てを知っておるわけではないが、存在意義ということであれば知らんこともないぞ!」

葵「それを．．．．教えてくれる?」

エル「ふむ。

さきのことで葵も巻き込んでしまったからな．．．．。
話さんわけにもいかんだろう」

エルはゆっくりと目を瞑り、語るように話始めた。

もともとアーム・アビリティとはある錬金術師が作ったと言われている戦争用の兵器だったらしい．．．．。

敵にばれにくいように普段身に付けられる物を媒体としたデザインはいろんな国で使われるようになった。

しかし、デメリットが多すぎたアーム・アビリティはいつしかこの国でも使われなくなってしまうみたいだな．．．．。

契約をすれば常人を超えた力を手にすることが出来る．．．．だが、契約に失敗すれば死に至ることが多すぎたせいもあったのだろう。

それでも強行した国もあったそうだが、成功の確率が5%程度．．．
．成功したとしても、戦争で使えないような能力の場合もあるからな。

そこまでエルが言うと．．．．。

葵「でも、またアーム・アビリティの契約者が増えているような気

がするのですが？」

悠二「それにしても成功した契約者がここに2人もいるのはすごいな」

エル「確かにそうだな！」

エルはケラケラと笑っている。

そしてエルはまた語るように、

葵の質問の答えは・・・最近になってあることが判明したからなのだ。

アーム・アビリティを作ったと言われている錬金術師は、国がアーム・アビリティを使わなくなったことで作るのを止めたのだ。

そして今、世界中に散らばったアーム・アビリティを私や葵のように契約した者がいる。

昔、戦争で使おうとした国々が5%程度の成功者しか出せなかった理由は、契約の呪文の間違いが多かったせいでもある。

しかし、それでも50%の成功率しかないのだが・・・。

エル「葵は何故契約したのだ？」

突然エルは葵に話をふる。

葵「私は・・・両親がアーム・アビリティについて詳しくなかったの
で、幼い頃に両親によって契約させられた・・・らしいです」

エル「そうか・・・葵の母上と父上が・・・」

エル「もしかしたら葵の御両親は知っておったのかもしれない・・・」

エルは小さい声で呟いた。

葵「・・・・・・・・・・」

葵は聞こえてはいたが、エル話を聞きたいのか何も言わなかった。

エル「ここからがこの話の本題だ!!」

悠二「!?!」

エル「アーム・アビリティを作ることと止めた錬金術師が最後に残した作品があるということがわかったのだ」

葵「最後の・・・・作品・・・・ですか・・・・」

悠二「それって一体何なんだ?」

葵と悠二はその作品とやらの興味が惹かれた。

エル「その作品を錬金術師は世界中に散りばめたのだ。

それがアーム・アビリティなのか、全く違う物なのか・・・・・・そしてそれはいくつあるのかもわからない・・・・・・」

アーム・アビリティを作った者の最後の作品として、そのことを知る者がそれを手に入れようと動いている。

ある説によれば、全て手に入れた者が『世界を手に入れる』とか『願い事が叶う』などと言っているようだが、真実は明らかにされていない・・・・・・・・・・」

その作品を世は・・・・運命の欠片 Peace - of - Destiny と呼んでいる」

葵「運命の．．．欠片．．．？」

悠二「世界を手にするって．．．」

エル「何かあるのかわからんのに、みんなは必死に“運命の欠片”を探しているのだ。
笑ってしまう話だろ？」

確かにそんな話を突然されても信じられないが．．．。

エル「実は私も探しているのだ」

悠二「！？」

葵「なんでエルちゃんは“運命の欠片”を探してるんですか？」

エル「それは恭介さんに会うためだ！！」

悠二「恭介って．．．まさか！」

葵「？」

エル「そう。

悠二の父上だ！！」

葵「速瀬くんのお父さん？」

悠二「なんでエルが親父に．．．？」

エル「恭介さんは私の命の恩人でもあり、師でもある人だ」

目的（後書き）

いやあゝみなさん。

なかなか話が進まなくてすみません・・・。
そして、お気に入り登録がありましたあゝ！！

めっちゃ嬉しいです！

ありがとうございます！

昔話

5年前．．．．

エルは腐敗臭がする瓦礫の上に座っていた。
まだ粉塵が止まない戦争の終わりを見ていた。
そんなエルの前に現れたのが速瀬 恭介だった。

恭介「お前．．一人か？」

エル「．．．．」

恭介「俺と一緒に来い！」

この人は誰なんだろう？

いや．．．どうでもいいか．．．

両親が目の前で死に、何十人もの死体を見てきたエルの心は、すでに壊れかけていた。

でも．．．あたたかい．．．。

右手に繋がれたこの男の手はとてもあたたかかった。

エルがその男に連れて来られたのは山奥の民家だった。

恭介「しばらくの間ここで生活してもらおう。
なにか必要な物はあるか？」

エル「．．．．」

恭介「そうだ！」

名前．．聞いてなかったな。

おれは恭介だ！よろしくな坊主！」

エル「・・・・・・・・ナ・・・・」

恭介「・・・・ん？」

エル「私は・・・・女だ」

恭介「そ・・・・そうだったか・・・・」

恭介はハハハと笑いながらエルの頭を撫でた。

恭介「それでお譲ちゃんの名前は？」

エル「・・・・エル・・・・」

エル・クラフト」

これが、エルと恭介の出会いだった。

あの出会いから数日が経った。

エル「恭介！」

エルもすっかり元気を取り戻していた。

恭介「恭介さんだって言っただろ、エル？」

エル「おお、そうだったな！」

恭介さん、早く稽古をつけてくれ！」

恭介と一緒にになってエルが最初に頼んだことは『強くなりたい』ということだ。

それからエルは毎日のように恭介に鍛えられている。

恭介「全然だめだ！」

そんなんじゃない誰にも勝てないぞ？」

エル「．．．ハア．．．ハア．．．」

毎日朝から日が落ちるまで稽古を続けている。

恭介「エル、拳つてのはただ振り回すもんじゃない。」

エル「．．．？」

恭介「お前のはただ力任せに拳を出しているだけ…

パンチつてのは突くものだ。

腕や肩だけで殴ろうとするな！

地面を支える足で支え、腰を回して正確に相手に突き出す。」

エル「．．．．．わかった」

恭介「よし！」

もう一度だ！！」

エル「これは？」

ある日恭介がエルに見せたのは十字型のペンダントだった。

恭介「これはA・Aアーム・アビリティといってな、ある契約をすることで特別な力を手に出れるという物だ」

エル「特別な力？」

恭介「ああ．．．だがその力が手に入るかどうかは5割しかない。失敗する可能性もある危険な物だ」

エル「失敗するとどうなるのだ？」

恭介「失敗すればその者の魂がこのアーム・アビリティに吸い取られてしまう．．．
つまり死ぬということだ！」

エル「．．．死．．．ぬ．．．？」

恭介「だが、契約しなければただの物でしかない。
これを．．．お前に渡しておく。
強くなるためのお守りとしてな」

エル「でも、契約というものをすれば強くなれるのだろう？」

恭介「ああ、だがお前には契約の儀式のやり方は教えない」

エル「．．．え？
なぜだ？」

恭介「さっきも言ったように契約しようとするものの半分は死んで
しまうからな。」

それに、そんな物を使わなくても強くはなれる．．．
お前はそんな物には頼るな！」

エル「．．．．．」

エルは小さくうなずくと、そのペンダントを首にかけた。

エルが恭介と修行を開始してもう2年が経とうとしていた。

恭介「．．．ハア．．．ハア．．．」

エル「．．．ハア．．．ハア．．．」

今日もまた1日中修行して、2人とも疲れている。

恭介「．．．今日はここまでにするか．．．」

エル「．．．ハア．．．ハア．．．そうだな」

恭介「それにしても、大分強くなったな」

エル「！！
本当か！？」

恭介のその言葉に、エルは喜びを隠せずに恭介の周りを飛び跳ねている。

恭介「ああ．．．．もう俺と対して変わらんだろ！」

エル「むふふふ」

恭介はあくまで普通の戦闘では互角と言いたかったのだろうが、エルはその日顔のにやけが止まらなかった。

エル「そうかそうか．．．．私と恭介は互角か！」

恭介「．．．．敬語！」

エル「おお、そうだったな！」

恭介さん！」

そんな他愛のない話をしてエルと恭介は眠りについた。
そんな日常を送っていた二人に突然の別れがやってきた。
いつものように修行を終えた二人が帰宅すると、家の中に見知らぬ男がイスに腰をかけていた。

「やっと帰ってきたか．．．．」

エル「だれだ??」

恭介「．．．．PODか．．．．」

エル「POD!？」

「さすが速瀬 恭介だ。
なぜ私が来たかはわかるかな？」

恭介「さあな……」。

名前も明かさぬ者に話すことなどないよ」

「ははは、噂通りの男だ！

これは失敬した。私はPODの幹部、エポワール・ブロアという……
……よろしく」

ブロアはそう言うと言と握手を求めた。

恭介は拒むことはせず、握手を交わした。

エル「??」

エルはまだこの状況を理解していないが、何も言わずただ二人を見ていた。

ブロア「さて、私が来た理由は唯一つ……速瀬 恭介よ、今
すぐPODに復活して『運命の欠片』の搜索に協力しろ」

恭介「……」

エル「運命の欠片？」

ブロア「ん？」

ところでその小さなガキはなんだ？

お前の子どもはもう少し大きかった気がするが．．．」

恭介「!？」

．．．なるほどな．．．俺のことはもう調べ済みってわけか．
．．．」

エル「!!」

恭介さん、子どもがおったのか？」

恭介「ああ、もう12歳くらいになっているはずだ」

フロア「また戦争孤児でも拾ったんですか？」

恭介「だったらどうした？」

フロア「あんまり関心しませんね．．．」。

あなたが拾ってきた者たちが今何をしているか．．．わからないわけではないでしょう？

確実にPODにとって不利益にしかない」

恭介「あいつらは俺が育てた．．．PODにとってどうかは知らんが、俺にとっては実の息子と同じように愛する者だ!」

フロア「いただけませんねえ．．．」

それはPODに戻らないととっても？」

恭介「当たり前だ!」

フロア「．．．．残念ですね．．．．
では．．．．」

恭介「エル！
今すぐここから離れろ！」

エル「??」

恭介「早くしろ！」

フロア「遅いですよ」

ドッ

見えない何かエルの腹部にあたる。

恭介「!!?」

エルは家の入り口の扉に吹っ飛ばされた。

エル「．．．グ．．．なにが．．．?」

フロア「へえ．．．．今ので意識が飛びませんか．．．。」

さすが子どもとはいえ恭介氏が鍛えているだけはあるわけですが・
・・あれではまだまだ話になりませんね・・・」

恭介「ク・・・お前！」

フロア「何です？」

子どもには手を出すな・・・とか言うんですか？
ばかばかしい・・・

今は子どもでもあなたに鍛えられた者は脅威になる前に潰しておく
のはPODにとって当たり前のことでしょう」

恭介「なるほど・・・さすが屑組織だな・・・
だから俺はお前たちのもとには戻らないんだよ」

フロア「では、手筈通りに死んでもらいましょう」

昔話（後書き）

また更新が朝方になってしまった。

どうですか？この書きかた．．．。

見辛いという方はいらっしゃるのでしょうか．．．？

もしそうなら直します！

てか今日からまた1週間が始まる．．。

あ、今日は月曜なんです。笑

仕方がない．．．．．頑張るかあゝ！

スフィングスゲーム（前書き）

やっぱりバトルを書くのは難しいです。。

前書きを書くのは初ですが、あったほうがいいのかな？

でも特に書くこともないんで・・・・・・本編へどうぞ！笑

スフィングスゲーム

フロア「．．．さすがです」

恭介「嬉しくない言葉だ．．．」

あれから数時間の戦闘でフロアはほとんど無傷、恭介には無数の切り傷がついていた。

恭介は決して弱くはない。

むしろこの世界では強いと言える。

しかし相手はPODの幹部で、しかも相手は恭介のことを調べ上げている。

それにくらべて恭介はフロアのことを何も知らない。

数時間戦闘をしても何もわからないのだ。

能力者というのはわかる．．．しかしそれが何でどんな能力なのかまるで見当がつかないのである。

A・Aの戦闘において何の情報もないというのは直接死に繋がるといっても過言ではない。

恭介（クソ．．．何か見えない物で斬りつけられているようだが．．．）

フロア「何で斬られているのかはわからない？．．．ですか？」

恭介「!？」

フロア「別に私は読唇術の心得があるわけでも能力というわけでも

ありませんよ？

ただ、私と戦闘した者たちは皆そう思うのです。
あなたも例外ではないようですね」

恭介「よほどの自信があるようだな！
だが．．．」

フロア「？」

エル「私がいる！」

フロア「！！？」

先ほどまで倒れていたエルが、フロアの後ろから殴りかかっていた。

エル「もらった！！」

エルの拳がフロアの顔を直撃しようとしていたが、その拳はくしくも空をきった。

エル「！？」

恭介「！？？」

フロア「たしかに気付きませんでした．．．
不覚です．．．しかし遅すぎる！

あなたのような子どもに遅れをとるほど弱くはありませんよ。」

エル「クツ．．．」

恭介「だが、2対1という状況は変わらん！
エル、頼むぞ？」

エル「おお！」

エルと恭介がブロアに対して戦闘態勢をとる。

クツクツク．．．．．

ブロア「笑止！

たかがガキが増えたぐらいで．．．私をあまり舐めないでいただきたい」

そう言ったブロアはエルと恭介目掛けて向かってきた。

恭介「小竜ショウリユウノカゴの加護！」

恭介はそう言って手を前に突き出すと、小さな竜のようなものが恭介とエルを包み込んだ。

ブロア「またソレですか？」

その間に恭介が出たであろう竜はボロボロに傷ついていく。

ブロア「そんな陳腐な防御で私の攻撃を防ぎきれるとでも？」

その刹那、小竜の加護がバラバラに碎け散る。

恭介「クッ．．．」

エル「そこだあー」

小竜が砕け散った瞬間にエルはフロアに向かっていった。

右手を前に突き出す．．．まるで正拳のように放たれたエルの拳はまっすぐにフロアに直撃する。

しかしそれは何かによって防がれた。

フロア「あなたの攻撃は届かないとさっき言ったばかりでしょう？」

エル「！！」

エルの拳を防いだフロアはエルに蹴りをいれてエルを吹き飛ばす。

恭介「エル！？」

フロア「ふっふっふ．．．」

エル「そうか．．．」

エルはまたしても立ち上がり、フロアを睨みつける。

フロア「こんの糞ガキが．．．いいかげんに．．．」

エル「いいかげんにしろ！

．．．．．だろ？」

フロア「！？」

エル「ようやくその薄気味悪い笑顔を変えてやれそうだ」

恭介「??」

フロア「!!? . . . やってみろ」

恭介「何かわかったのかエル？」

エル「ああ . . . わかったが、私だけではどうすることも . . .
」

恭介「なら、俺がいれば出来るんだな？」

エル「もちろんだ」

恭介「敬語は？」

エル「はい、恭介さん！」

恭介「じゃ～お前が見つけたこと . . . 見せてもらうぜ？」

フロア「何かわかったようですが . . . それでも結果は変わり
ません」

フロアは余裕の笑みを浮かべ、何がきてもいいように体勢を立て直
している。

エル「恭介さん、少し時間を稼いでくれますか？」

恭介「了解！」

そう言つて恭介はフロアに向かつていく。

フロア「何度やっても同じです」

恭介「それはどうかな？」

ガキイ「・・・」

フロア「!？」

恭介「風なんだろ？」

お前の能力は？」

フロア「あのガキですか・・・」

恭介「俺に似合わず頭がきれらしい」

フロア「確かに私の能力は『風の指揮者』かせのタクという風を操る能力ですが・・・」

それがどうしたというのですか？」

恭介「風を操る・・・空気を操るわけじゃない・・・」

フロア「ふん・・・何を言ってるんですか！」

ブンッ

フロアが手を振ると見えない風が恭介に襲い掛かる。

否。

恭介にはかすり傷もつかない。

フロア「何!？」

フロア（バカな．．．今のをかわしたというのか？）

恭介「その様子じゃゝ気付いてないらしい」

フロア「何だと!？」

フロアは明らかに動揺していた。

フロア（気付いてない？

私が．．．何を!？）

恭介「考え事はあとにしたほうがいいんじゃないか？」『スフィンクスゲーム』」

フロア「こ．．．．．これは．．．」

フロアの前．．．恭介が出現させたのはスフィンクスだった。

スフィンクス『どんどん進んでも元に戻ってきてしまうものは?』

フロア「は？」

フロアの前に現れたスフィックスがいきなりなぞなぞを出し始める。さすがのフロアもこの状況についていくことができない。

恭介「俺のことを調べたらしいが、これは初めてだったみたいだな。さて、早く答えないと．．．．．ヤバイぜ？」

フロア「私をおちよくってるのか？
ふざけやがって！！」

恭介「能力者同士のバトルでおちよくなるなんてしないさ．．．」

スフィックス「時間切れた。
罰ゲーム！」

恭介「あゝあ、残念だったな」

スフィックス「答えは時計だ。
執行！」

フロア「．．．え？」

ザシュ！！

スフィックスが消えるとともにフロアの体には無数の切り傷がつけ

られていた。

恭介「なるほど．．．答えは時計か！」

そう言った恭介の体からは先ほどまでフロアにつけられていた傷が消えていた。

そう．．．まるで二人のダメージが入れ替わったように．．．。

恭介「俺の『スフィックスゲーム』は答えられなかった奴には答えに関する罰ゲームが執行される．．．。

今回の答えが時計だったから．．．．おそらく、お前と俺のダメージの時間が入れ替わったんだろう」

フロア「．．．クツ．．．でたらめな．．．」

恭介「さて、時間は稼いだぞ．．．エル」

フロア「!？」

エル「稼ぎすぎて待ちわびたぞ！」

フロア「？」

エルの作戦とは、この部屋にある窓や扉を完全に塞ぐことだった。それもただ閉じるだけでなく、枠にガムテープでしっかり固定している。

フロア「なんのつもりですか？」

恭介「よく思い出すんだな．．．

俺がお前の攻撃をかわしたことを」

ブロア「それがなんだというのです？」

エル「風を操る能力．．．つまり風がなければ操れない！

恭介さんはさっき、お前の攻撃をかわしたのではなく風の通り道を作って風に避けさせたのだ！」

恭介「つまり、こつやって部屋を密閉すれば風は入ってこない」

ブロア「クツクツク．．．それで私を封じたと？

どんなに部屋を密閉したとしても、人が動けばそこに風が出来る。どんな小さな風も私は．．．」

恭介「そんな少量の風で俺に対抗できると思うなよ！」

ブロア「！！」

恭介「とつとと帰りやがれ！『アルビオン』」

恭介の手から放たれた光の玉はノロノロとブロアに向かって行く。

ブロア「なんですか？

このノロマな攻撃は？」

そつ。恭介の出した光の玉は誰もがかわせるスピードで向かっている。

当然ブロアもその玉を簡単にかわした。

否。

エル「ほら！
風を作つてやる」

ブロア「何！？」

いつの間にかブロアの後ろにいたエルが、その光の玉を蹴り返した。

ブロア「何故気付かなかった！？」

それも当然といえば当然。

いくらなんでもあんな遅い攻撃をするからには、何かあると思い込んでしまうのが人の性である。

それがでたらめな能力を持つ恭介だからこそ、十分に注意しなければならぬ。

しかしソレが仇になった。

さすがのブロアもこれには風を操り防御する時間も、避ける時間もない。

光の玉はまっすぐにブロアにあたった。

しかし、特に何か起きる様子はなかった。

．．．．．。

フロア「一体何をしたんだ？」

今、先ほどまで何もなかったように三人は立っている。

恭介「本当は俺がしないといけないんだが・・・」

フロア「??？」

恭介「頼むぞ・・・エル」

エル「まかせろ！」

そう言つてエルはフロアに近付き、フロアの腰に手を添えた。

フロア「!??？」

この時、ようやくフロアはあることに気がついた。

フロア「か・・・体が・・・動かない!!?」

エル「んどこにしようかのう・・・
よし！」

ふらんすうという所に行こう!」

フロア「・・・は?」

シュンッ

するとフロアの姿がこの部屋から消えてしまった。

恭介「『アルビオン』の光の玉は”一度目”に触れた者の言葉は絶対で、それを”二度目”に触れた者が実行しなければいけないヘンテコな力なんだよ」

エル「．．．ヴ．．．」

ダダダダダダダダ

エルは具合悪そうな顔で扉を蹴り破ってどこかに行ってしまった。

恭介「しかし、その絶対の言葉を言った者は異常な吐き気に見舞われると．．．」

それからエルは2時間ほど外で嘔吐していた。

スフィングスゲーム（後書き）

ふう．．．．。

最近やたらと寒くなってきた。

パソで書いてるんだけど、手が冷たくなりすぎてやばい！
え？

ストーブつけろって？

今年はまだストーブをつけてないんだぜ！！

耐えられることまで耐えてやる！

そんなことをしてるけど．．．．．きつと雪降ったら一瞬でつけ
ちゃうね．．．。笑

そろそろ降るかな．．．雪。

もう一人の．．．．．（前書き）

初感想をいただきました！！

めっちゃめっちゃ嬉しいです。

きっと俺は褒められて伸びるタイプだな。笑

やる気がまるでオーラのように溢れんばかり．．．．．。

むふふふ．．．。

もう一人の・・・

悠二「親父が・・・契約者・・・？」

長々とエルの話聞いていた悠二が呟いた。

葵「でも、その時にエルちゃんは契約はしないと約束したんですよ？」

エル「その話はまた別なのだ」

そう。

今はまだ・・・。

エル「そんなことより、どうするのだ・・・悠二？」

突然エルの顔が真剣になったかと思うとエルは悠二に問いかけた。

どうする？

俺が・・・？

何を．．．？

悠二がエルの言葉を不思議に思っていると、葵が悠二に答えを示した。

葵「これから．．．どうするのかってことですよ．．．」

エル「私は、恭介さんに頼まれて悠二のところに来た．．．。だが、悠二の決断によつては私はすぐにでもここを出て行く．．．。．．。

それが、恭介さんとの約束でもあるからな」

悠二「これから．．．どうするか．．．」

悠二（．．．もし俺がこの物語の主人公であるなら．．．。とつとつこのA・Aと契約して、超人的な力を手に入れて親父と運命の欠片を探す旅にでも出るんだろうが．．．。）。
どうやら．．．この物語の主人公は俺ではないらしい。
突然現れたこの少女こそが主人公なんだろう．．．。
だから俺は．．．（。）

悠二はフツと笑った。

悠二「俺は、その運命の欠片とかいう物を探す！」

エル「!!」

葵「……………」

エル「……………何故だ？」

え？

そういう流れじゃないの??

悠二は戸惑ってしまった。

不意に付かれたエルの言葉……………だが！

悠二「それは俺が主人公ではないからだ」

葵「はあ？」

葵はどうやら呆れている．．．いや、完全に変なものを見るような目でこちらを見ている。

確かに今の俺の言葉は意味不明だ。

いきなり主人公とか言われても．．．ねえ？

悠二「俺も．．．信じるよ。

運命の欠片に願いが叶う力があることを。

そして願う．．．．．とつとつこの漫画的展開を終わらせて、普通に生活できることを！」

意味不明．．．。

だけどエルと葵はそんな悠二の言葉を聞いて微笑んだ。

エル「合格だな！」

葵「普通の生活．．．ですか．．．。
つまり速瀬くんは私と普通に交際して、『あんなこと』や『こんなこと』をして過ごしたいと．．．。」

キモツ．．．。」

え？

悠二「そんなこと言ってないよね？？」

ね？
「

葵「・・・うるさいです」

ドカッ

結局悠二は葵に殴られる運命だったようだ・・・。

今はまだ肌寒い風が吹きぬける4月。

桜の花びらが舞い、春の訪れを歓迎しているようだ。

その春の朝日に起こされる一人の男・・・黒崎くろさき 新は今年高校1年生になる。

4月10日の今日が入学式の新は目覚めてから顔を洗って歯を磨く。真新しい制服に身を包み、朝食を食べるため一階にあるリビングのドアを開いた。

新「おはよう」

そんな当たり前の朝の挨拶を父と母に交わして、朝食が並べてある

テーブルの椅子に座った。

それを見て、新の母がコーヒーを息子にだす。いただきますといって食べ始めた新の前には、新聞を広げた父が何やら不機嫌な顔をしている。

また何か事件なのか？と新は考えていたが、父が何も言わない以上は口を出すことが出来ない。

新の父は警察官である。

近年急激に発生したある事件によって多忙の毎日を送っている父が今日の入学式に出席できることはとても珍しいことだ。

父「またか」

そんな一言を父が発したと同時に、新は少し残念な顔をして父を見る。

父の携帯電話が鳴ってしまったのだ。

それは事件があったことを示す合図であるとともに、新が入学式に参加できないということでもあった。

父は最近急激に犯罪が増えた原因である『A・A犯罪』の指揮官に任命された優秀な刑事である。

『A・A犯罪』とは、未だに解明されていない現象・・・人間の進化によって犯罪を犯す者たちが起こした事件の総称だ。

人間の進化によって得られる力は人それぞれであるが、現在100万人に一人の割合で存在している。

新が入学式に参加できない理由はその事件に関係している。

この地区で警察内にはA・Aを使える者はいない・・・。

A・A犯罪者に対抗するには同じような力を持った契約者ホルダーの力が必要なのだ。

つまり新は契約者ということになる。

父「また・・・お前には危険な目に合わせてしまうな・・・」

そんな父の言葉に新は笑顔で

新「俺にやれることは全力でやるよ」

この言葉は新が父の仕事を手伝うようになってから言い続けていることでもある。

4月10日、午前8時15分。

3階の校舎から玄関を双眼鏡で見ている者が一人。
ここは悠二たちが通っている学校だ。

その者がいる教室はわざとなのかとても暗い。
そこに一人の女生徒が入ってきた。

「今年の新生はどうだ？」

凜とした声は高校生とは思えないほど威厳がある。

双眼鏡を覗いている男子生徒はその声の主の方に振り向いた。

「今のところは．．．いないですね．．．」

男子生徒がそう言うと、女生徒は少しがつくりしながらも話を続ける。

「お前が最近見た契約者はあの女の子だけか．．．」

どうやらこの二人はA・Aのことを知っているらしい。

「ああ．．．あのビルの上にいた女の子ですか？」

そう男子生徒は言った。

どうやらエルのことを話しているらしい。

「せっかくカラスで街の中を見てもらったのに．．．一人しか見つけれんとはな．．．」

女生徒が男子生徒を哀れみの目で見ている。

「仕方ないじゃないですか！
契約者なんてそうそう見つかるものじゃないですよ」

男子生徒は涙目になりながらも女生徒に向かって言った。

「まあ、良い。」

それよりおもしろい情報が入った」

「おもしろい情報？」

男子生徒が首をかしげる。

「もしかして瀬名先輩ですか？」

「ああ……どうやら街中で契約者による事件が起きてるらしい」

「では……行きましょうか……」

そしてこの二人は校舎を出た。

もう一人の．．．．．（後書き）

書きかた？を少し教わりまして．．．。

とりあえず全ての章を訂正いたしました。

まだまだ初心者なので．．．ここが駄目！っていうのがありましたら、教えていただけると作者は喜びます。笑

そももつと作品をおもしろくして、おもしろくしておもしろくしておも．．．．．。

と、とにかくもつと頑張ります！笑

似て非なるもの（前書き）

やあゝみんな、僕だよ。笑

今日も毎日更新を更新中です！

出来れば毎日書きたいですなあゝ。。。

見てくれている方も増えているようで、作者は大喜びです！

そういえば今期アニメの『未来日記』がおもしろい！

俺もあんな作品が創りたい！

というわけで．．．小説をどうぞ！笑

似て非なるもの

「どついつ状況だ？」

新と新の父、新造しんぞうが事件現場についたようだ。

「中の状況はまだなんとも．．．しかし人質は無事であると思われます」

新造の言葉に一人の警官が答えた。

新造「そうか．．．」

新造たちがそんな会話をしていると、

「奈央さん！」

．．．はあ．．．はあ．．．早いですよ．．．」

「お前が遅いんだよ！裕一！」

どうやら先ほど暗い教室にいた二人も事件現場に着いたようだ。

裕一「まだ解決してないようですね」

奈央「私たちが解決するんだよ！」

裕一「でも、警察が囲んでてネズミ1匹中に入れないですよ?」

奈央「わかってる・・・だから適当な奴を・・・」。

!?」

新造「じゃあ・・・新!

頼んだぞ!」

新「わかってる。

人質の安全が第一・・・犯人はその後で捕らえます。

犯人の能力はわかりますか?」

どうやら新は一人で犯人が立てこもってるこのビルに突入するよう
だ。

奈央(あの制服はウチの学校の・・・)

その会話は聞こえないが、奈央と裕一は新を見ていた。

奈央「裕一・・・分かってるな?」

裕一「わかってます」

奈央「では・・・行くぞ!」

「能力はまだ・・・」

顔を伏せながら若い警察官は新に言う。

新「わかりました．．．では、行つて来ます！」

新造「ああ．．．気をつけてな」

新「．．．!!!？」

はい．．．父さん！」

何か違和感を感じた新だったが、ビル突入の準備を始めた。

奈央（．．．こいつは．．．一体何なんだ？）

裕一（わかりませんが．．．ウチの生徒なら後でじっくり調べましょう）

奈央（．．．そうだな）

奈央と裕一は何故か小さな声で話していた。

「．．．警察が何人いようが俺には関係ねえ．．．」

犯人が立てこもっているビルの中。

人質は3〜4人程で、全員気絶している。

新造「犯人の要求は何だ？」

ビルの下で新造がほかの警察に聞いた。

「それが．．．ガキを連れ来いの１点張りで．．．」

新造「ガキ．．．だと？」

「はい、しかし名前がまだ．．．」

新造「いや．．．とりあえず新に任せよう」

そしてまたビルの中。

「．．．早く連れて来い．．．」

あのガキを．．．．．エル・クラフトを！」

男はそう言いながら部屋の中をウロウロしている。

その時！

バリーーンという音とともに新が窓から侵入した。

「！??？」

男は一瞬焦ったが、すぐに新の方を見据えた。

「．．．ガキと言ったが．．．お前じゃねーよ．．．」

男が低い声で新を威圧するように言う。

新（．．．ガキ？
なんのことだ？）

新が男の言動に対して考えを廻らせていると．．．。

新（消え．．．!?!?）

ドッ．．．。

男の拳が新の腹部にめり込んでいた。

新「グッ．．．」

新はそのまま壁に叩きつけられる。

今日は入学式だ。

悠二（入学式ってなんで在校生全員出なきゃなんないんだ？）

悠二はいつも通り葵と一緒に登校していた。
しかし、またいつもの如く会話はない。

葵「!?!?!?」

ふと葵が足を止めた。

悠二「どうかした？」

そんな葵を心配になった悠二は葵に言葉をかける。

葵「．．．契約者です」

悠二「え！？」

ど、どこに？？」

葵が何かを聞き取ったのだろう。

悠二も契約者と聞いて焦っている。

葵「．．．しかし．．．少し遠いですね．．．」

葵でも断片的にしか聞こえないのだろう。

つまりここから5キロ以上離れていることになる。

悠二は少し安心したのか、落ち着いた声で葵に話しかける。

悠二「じゃー俺たちを狙ってるわけじゃないんだよね？」

葵「．．．みたいですな．．．」

でも．．．」

悠二「でも？」

葵「この契約者．．．もしかしたら．．．」

悠二「？」

葵はもつと耳を澄ませてその音だけに集中した。

新「・・・ガッ・・・」

新は口から血を吐きながらも立ち上がる。

「・・・ほう・・・」

あの一撃は完璧に入った。

それでも立ち上がる新に、男は感心する。

新（な、なんだ・・・さっきの・・・ぜ、全然見えなかった・・・）

息が・・・苦しい。

口の中も血の味しかない・・・。

だが・・・まだ動ける。

「タフだな小僧。

ガキが来るまでの暇つぶしにはなるな・・・」

新（また・・・ガキって・・・？）

新はこの男が何を言ってるのかわからなかったが、

新「お前の言うガキは．．．ここには来ないぞ？」

「なんだと？」

新は何も分からなかったが、この男にカマをかけてみた。

新「来たとして．．．お前に何か特でもあるのか？」

「お前には関係ないだろ」

チツ．．．失敗か。

でも、時間は稼げた。

この部屋の状況も頭に叩き込んだ。

次にあの男が”消えて”も対処できる。

「．．．とりあえずお前を殺せば．．．警察は俺の要求を聞くかな？」

新「．．．さあな」

「そうか．．．」

消えるか？

「では殺すでしょう」

そして男は消えた。

ここだ！

またもいつの間にか新の後ろにいる男は新の身体に拳を叩き込む。

ように見えた。

男の拳は新の身体に当たる寸前で止まっている。
否。

届いていない。

新はそのまま後ろに跳んだ。

新「何度やつても無駄だ！
お前の攻撃は俺には届かない」

「???」

．．．この状況．．．。
どういうことだ？」

新「？」

男は4日前のことを思いだした。

「まさか．．．そんなことが．．．」

そして．．．悠二たちも．．．。

葵「まさか．．．」

悠二「？」

葵「今街にいる契約者は．．．あの狩島だと思います」

悠二「な、なんだって!？」

狩島 堅。

4日前．．．エルが悠二の家に来たときに悠二のA・Aを狙ってきた契約者だ。

『時の支配』という能力を使い、『異常聴力』を持つ葵ですら感知できずに苦戦した。

その時はエルが『重力法則無視』で狩島を倒したが．．．。

悠二（結局気絶させたまま、あの公園に放置してたからな．．．）

葵「話を全部聴くことはできませんが．．．．．どうやらあの男はエルちゃんを探しているそうです」

悠二「エルを!？」

葵「よほど悔しかったのでしょう．．．しかし今回は騒ぎが大きす

ぎて．．．警察に包囲されている．．．．．といったところでしようか？」

悠二「警察って．．．．．警察はA・Aのことを知ってるの？」

葵「もちろんです。

今も誰かが交戦中みたいですね．．．」

悠二「そっか．．．。

じゃーエルは??」

エル「くそッ．．．。

またお前か！

どうやらまた私にボコボコにされたいらしいな」

葵「．．．．．。

エルちゃんは家でゲームしてるみたいですね．．．」

悠二「そう。

で、どうする?」

悠二は真剣に葵に聞いた。

葵「どうする・・・とは?」

悠二「いや、俺たちもそこに行っただ方がいいのかなって・・・」

葵「行っても私たちに出来ることは無いでしょう・・・私たちはあの男は倒せない。

ここは警察に任せましょう」

悠二「・・・そっか。

そうだよな」

悠二と葵は少し不安に駆られながらも学校へと急いだ。

狩島「何故お前があのガキと同じ力を・・・」

新「・・・?」

狩島「・・・いや・・・そんなはずは無い・・・」

そう。

A・Aにまったく同じ力なんてありえないのだ。

エルの『重力法則無視』は現在契約しているエルしか使えない。ということは、新は『重力法則無視』と似て非なるものである可能性が高い。

しかし、狩島にとってこれほど心が揺さぶられることもないだろう。狩島は気がつく和人質を盾にして、新と向かい合っていた。

新「くそッ．．．いつの間に．．．」

狩島「．．．ククク．．．動くんじゃねえ．．．」

この女を殺されなくなかったらな」

幸い、人質になっている女性は気絶している。

しかし、動くことはできない。

その時、狩島の右手には1匹のネズミがしがみついていた。

狩島「!!!」

狩島は別にネズミなど怖くはなかったが、そのネズミを振り払おうと右手を振り回している。

新「．．．．．?」

しばらくして狩島がネズミを床に叩きつけると、ネズミが煙に包まれた。

狩島「!!!?」

新「??」

「やつと出番かあゝ」

新と狩島の目の前に現れたのは、まだ高校生ぐらいの女の子だった。狩島もあまりの出来事に放心状態だ。

奈央「私は桐谷きりたになお 奈央。よろしく。
それより犯人さん．．．いいの？」

狩島「!？」

その奈央の言葉と同時に、奈央は狩島の肩に手を置いた。

奈央「私．．．T型だよ？」

狩島「．．．!？」

チッ

狩島は舌打ちをしながらも奈央の手を払いのけた。

「狩島 堅。34歳。
能力は．．．『時の支配』。C型かあゝ．．．。
自分以外の時間を全て止めることが出来る能力。
しかし、自分以外全てを止めてしまいがゆえに．．．物体を動かす
ことも出来ない．．．か。」

俺はいない能力だなあゝ」

またも突然現れた男に狩島も新も戸惑っている。

裕一「あ、俺は永井ながいゆい裕一。よろしく」

狩島「・・・何なんだお前ら・・・」

狩島の動揺は治まらない。

今、永井 裕一が言った情報が全て当たっているからだ。

裕一「さて、黒崎くん。

あの男を捕まえるなら今しかないよ？」

新「!!?」

新造「やったな！新！」

あの後、狩島はあっさりと新に捕まってしまった。

何故かはわからないが、狩島能力が使えなくなってしまったからである。

おそらく、突然現れたあの二人の能力なのだろうが、新は他の事に

気を取られてしまっていた。

それは二人の着衣である。

新（あれは．．俺が通う学校の．．）

そして二人が最後に言った言葉。

奈央「黒崎くんだったけ？」

良かったら学校でまた会いましょう！」

裕一「僕らはいつも3階の空き教室にいますから」

結局、新は入学式に遅刻してしまった。

似て非なるもの（後書き）

んゝいかがだったでしょうか？

まだ、新や奈央、裕一の能力が明らかにされていません。

でも、わかる人はすぐに感づいちゃう？

作者はアホなので・・・笑

結構書いたと思いますが、この作品を楽しみにしてくれる方が一人でもいれば・・・いると信じていれば、まだまだ頑張れます！笑
本当はそんなの関係ねえー！と、自分が書きたいから書いてるんだと胸を張って言いたいんですが、やっぱり見てくれている方がどんな気持ちで読んでいるのか気になってしまふ・・・・・・・・小
心者です・・・・・・・・はい。

よーし、頑張るぞー！

DACT部（前書き）

やっと更新できた。

とにかく見てやってください！笑

D A C T 部

「ここか．．．．．」

遅刻した入学式を終えた新は、3階の空き教室の前まで来ていた。

躊躇．．．しているわけではないが、何故か扉を開けることは出来ないでいた。

新「ここで立ち止まっても仕方ないか」

意を決したのか、新はその教室に手をかけた。

あの二人がA・Aをどこまで知っているのか．．．。

そして二人の能力は？

それを知るだけでもここに来た理由になる。

情報は武器だ。

この世界では簡単に人を信用してはいけない。
それがたとえ親であっても……。

ガラッ

そんな音とともに、教室の扉は開かれた。

薄暗い……。

さっきまでいた自分のクラスの教室とは全然違う雰囲気には立ち止まる。

しかし、開けてしまった以上はこのまま進まなければならない。

誰もいないのだろうか……。

薄暗い教室の中を進む。

まるで物置小屋のようにいろいろな物が置いてある。

新は置いてある物をすり抜けて教室の奥まで進んでいく。

新「ん？」

奥まで進むと、少し明るい所がある。

電気が点いているのだろう。

新がそこまで進むと、人影がそこにあつた。

新（誰だろう？）

その人影の人物は、新の気配に気付いたのか新の方に振り向いた。

薄暗い教室で目が合う二人。

新がその人物に声を掛けようとした時、あることに気がつく。

新（下着・・・！？）

そこにいたのは新が朝に会った二人のどちらでもない女の子だった。着替えの途中だったのか下着姿の彼女は特に叫ぶわけでもなく、自分を見ている新をまじまじと見ていた。

新はすぐに目を逸らして横を向いた。

新「す、すみません！

まさか女の子が着替えているなんて・・・」

新はすぐに弁解をした。

ピンタされることも覚悟している。

しかしその女の子は何を言っわけでもなく、着替えを続けた。

その間も新は動かない。

静寂が教室を支配している。

そんな中静寂を破ったのは女の子だった。

「あなたが黒崎 新くん？」

おそらく制服から白衣に着替えたのだろう。

眼鏡を着用した彼女は、黒い髪を後ろで左右に分けて縛っている。

おそらく先輩なのだろうが、150cm程の身長と幼さが残る容姿は年下にしか見えない。

新「あ、はい・・・そうですね・・・」

とりあえず質問されたことに答える新。

「やっぱり！奈央ちゃんが言ってた契約者ね！」

奈央ちゃん？

ああ、あの女の先輩か。

ちゃん付けで呼ぶということは同じ学年なのだろうか・・・。

どう見てもそうは見えない。

新とその女の子が話していると、教室の扉が開かれた。

「おっ！もう来てたか」

入ってきたのは今朝の二人組。

慣れているのかごちゃごちゃに置かれている物をするすとかわして歩いてくる。

「よく来たな新入生！」

そう言ったのは男の方。

確か永井 裕一といったか・・・。

もう一人の女の先輩は桐谷 奈央だ。

新「・・・え・・・っと・・・」

変化する展開についていけない新は上手く言葉が出ない。

奈央「そうだった。いろいろと説明しなければならぬな」

そう言ったのは奈央である。

奈央「最初に言っておく、ここは私たちが作ったD A C T部だ！」

新「D A C T部??」

裕一「いやいや、まだ同好会だけだねえ」

ゴンッ

一応本当のことを言った裕一に奈央は拳骨を喰らわせた。

奈央「確かに”まだ”同好会だが、いずれ正式な部活にしてみせるさ」

意気揚々に言う奈央に誰も何も言うことが出来ない。

裕一（言ったらまた拳骨か・・・）

つまりD A C T部・・・改め、D A C T同好会は、アーム・アビリティA・Aによる犯罪や問題を解決するために行動するという目的があるらしい。

朝に事件に現れたのもそのためであると言う。

その中で<運命の欠片>を探すという目的もあるようだが、それは二の次らしい。

新「なるほど・・・」

奈央「だから警察と関係があるお前には是非とも入ってほしい」

確かにそんな目的があるのなら、事件をいち早く発見するのも必要だろう。

新「でも、部活になるためには5人の部員が必要ですよね？」

今ここにいるのは新を含めても4人。

部活となれば、学校側も協力してくれるし、新が入ることで警察ともコンタクトが取れるかもしれない。

それに……。

DACT部（後書き）

ちよつと短くなつてしまいましたが、更新することができました！

最近寒くなつて手が動かない〜。。。。

みなさん、もう冬ですね・・・風邪を引かないように気をつけてください。

新はこの部活に入るんですかね？

そんなことより！！

エルが最近空気になつてるのが悲しい作者です・・・。笑

早くみんなを絡ませたい！！

そんな作者の声でした。笑

D A C T 部？（前書き）

2つに分ける意味はあったのか・・・

D A C T 部？

新は警察内でも必要な人物であることは新も十分に理解していた。

だから高校に入っても部活に入る気もなく、ここにきたのも情報が欲しいからだ。

しかし、A・Aに関する部活なら入っても良いと考えている。
だが、同好会となると話は別だ。

新「ここには契約者しかいないのですか？」

最初に会った二人は契約者だろうが、もう一人の女の子は？

奈央「いや、契約者なのは私と裕一だけだ」

奈央はそう言うともう一人の女の子の方を向いた。

「あ、自己紹介がまだでしたね。
私は、瀬名こずえ（せなこずえ）と言います！」

契約者ではないですが、A・Aの研究をしています」

新「研究？」

瀬名「はい！A・Aって不思議じゃないですか。
だからすごく興味があるんです。

でもここでは主に街でおきてる事件の場所を特定し、奈央ちゃんに
連絡などもしていますが・・・」

この後も長々と自分の研究について話した瀬名だったが、新にとっ
ては全部知っている内容だったのでどうでもよかった。

しかしこれでこの三人のことはわかった。

この瀬名先輩のおかげで朝は現場に来ることが出来たのか。

新「この同好会が部活になる予定は？」

俺が入ったとしても一人足りませんよね？」

同好会という言葉に奈央はピクツと動いたが、新を勧誘しているた
めかまだ新には何もしなかった。

奈央「お前が入ってくれば可能性はある」

新「？」

裕一「実は俺と同じ学年に契約者がいる」

その言葉に新は驚いた。

まさか同じ学校に契約者が4人もいるなんてことはありえないだろう。

新は少し頬を緩めた。

しかしその事に気付かない三人は話を進める。

瀬名「でも何回勧誘に行っても断られるんですよ」

奈央「かなり無口で誰とも話さないと言われてるんだろ？」

裕一「それが最近彼氏が出来たらしいっすよ？」

どうやら勧誘しているはずの新を無視して話を膨らませている三人。

それが5分程続いて、ようやく奈央が新に話しかけた。

奈央「で？」

お前はここに入るか？」

ようやくまともな勧誘。

新「すみませんが、今はまだ入るわけには行きません」

奈央「！！」

予想が外れたのか、奈央は驚いた顔をしている。

新「俺は警察での仕事が一番大事です。

ここはそういうことにも寛大であるし、二人が契約者であるなら協力してもらえと思っています」

奈央「それなら・・・」

新「しかし部活でなら入っても良いと考えますが、同好会では出来ることも限られると思います。

それでは警察の情報も流すことも出来ませんしね」

そして新は「部活になったらまた誘ってください」と言い残し、教室を出て行った。

奈央「なああああー」

瀬名「あ、奈央ちゃんが壊れた」

裕一「峰岸に続いて黒崎もダメだったからなあ・・・」

奈央「部活になったら良いんですよ!？」

立ち直った奈央は何かを決意したようにガッツポーズをした。

奈央「まず、2年の峰岸 葵を必ず私たちの仲間にする!」

裕一「でも、あいつは話しかけてもなかなか返事もしてくれないんだぜ?」

奈央「彼氏が出来たって言ってたよね？
だから彼氏をまず勧誘する！」

瀬名「なるほど．．．彼氏さんが入ってくれば、峰岸さんも入ってくれるかもしれませんね！」

奈央ちゃんナイスです！と言った瀬名も乗り気だ。

奈央「ってことで裕一！」

その彼氏が誰なのか探してきて！！
あんたなら簡単でしょ？」

裕一「まあそれは出来るけど．．．」

こうして、DACT同好会の勧誘作戦が始まった。

「どうかした？」

顔を歪ませている葵に悠二が声をかける。

葵「．．．速瀬くん．．．．．」

悠二「何？」

葵「これから誰が何を言ってくるても耳を貸さないでください」

悠二「？」

葵「いいですね!？」

何故か峰岸が怒ってる。

何かしたかなと悠二は考えたが、すごい顔をしてくるので「はい!」
と元氣良く答えた。

D A C T 部？（後書き）

このまま明日・・・いや、今日投稿出来ればいいなあ。

違う話も書きたい。。。

けどもっとスムーズに書ければ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4212y/>

Peace-of-Destiny

2011年11月24日10時58分発行